

〈原 著〉

野球を題材とした漫画における女性の表象

中司 千裕*・神原 直幸*

The image of women in baseball comics

Chihiro NAKATSUKA* and Naoyuki KAMBARA*

Abstract

In recent decades, many studies have focused on gender biases of information by the mass media to visualize and correct male domination in sport. In this study, we selected 43 representative baseball comics and compared the female characters' roles and degree of presence to the target readership (sex, age) and date of publication. There were 5.9 women depicted, on average, and most of them were family or friends outside of the baseball scene. We found that the role of female characters changed according to the nature of the readers and date of publication; female characters played a more important role as coaches, players, or managers in comics for women, whereas we found few female players in comics for youths. In addition, the diversity of the roles of female characters has increased over the years. Findings suggest that drawings in baseball comics are still based on androcentrism, although the situation regarding the depiction of women has improved lately in this respect.

Key words: gender, content analysis, baseball comics

1. 緒 言

2011年に発表された世界経済フォーラムの「男女格差報告」において、日本は世界135カ国中98位と評価された³¹⁾。2006年より開始された同フォーラムによる発表において、日本は一貫して下位に甘んじており、前年度と比較しても4ランク落としたことになる。男女格差の是正に向けて、1972年には『雇用の分野における男女の均等な機会及び待遇の確保等に関する法律（男女雇用機会均等法）』が、1999年には男女共同参画社会基本法がそれぞれ制定され、さらに2001年には内閣府に男女共同参画局が設立されるなど、法制度を整備してきた日本に対する低評価は、法制度に依存した社会システムの改革の

限界を示している。こうした男女格差の原因としてジェンダーについての文化的ステレオタイプが挙げられており、その形成にマスメディアによるジェンダー表象のされ方が中心的役割を果たしていることが指摘されている⁴⁾⁵⁾。

ところで資本を必要とするマスメディアは、そのほとんどが国家や資本家などの権力者によって運営されており、その結果として現行体制を維持するためのイデオロギーがさまざまな形でコンテンツに盛り込まれる¹¹⁾¹³⁾³⁰⁾。その意味でリーダーシップやチームワーク、自己犠牲などといった近代産業社会を維持する上で有効なイデオロギーを内包するスポーツは格好のコンテンツと言える。繰り返し伝達されるイデオロギーは、個人の中に蓄積されていく⁸⁾⁹⁾と考えられることから、スポーツに伴って伝達される伝統的価値観は視聴者、読者に学習され¹⁾²³⁾、主流の価値観であり続ける。つまりスポー

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

ツはこうした価値観を再生産する装置と言える²⁾。スポーツにはさらに「体力や身体能力の高さが競技力に大きく関与する」という男性の優位性を正当化する特性を持つ。近年の兵器の軽量化・低反動化により戦争における体力や身体の強靱さの重要性が低くなった今日、スポーツはジェンダー最後の砦¹⁴⁾と言われる。

上述のスポーツが元来持つ特性は、伝達の際の編成や制作の過程を経ることにより男性中心主義が一層強調され³⁾¹⁰⁾、結果として女性をスポーツの実施から遠ざけている。スポーツ実施に代わり、女性に代理的満足を与える役割がアメリカにおけるチアリーダーや日本における運動部マネージャーであり、それら役割の一般化がスポーツを実施する主体としての男性とそれ見守り応援する女性という図式を強固にした²¹⁾。こうしたスポーツにおける男性の特権性を廃し男女間の不平等を可視化するため、新聞、雑誌、テレビにおけるスポーツ情報を分析対象とした研究が1990年代から始まった。それら研究では大会や選手の名称¹⁰⁾¹⁸⁾、中継本数³⁾や報道、選手のテレビCM登用量¹²⁾、映像制作³⁾¹⁵⁾やコメントのなされ方などさまざまな側面について男女間の不平等が繰り返し報告されてきた。

前述のようにスポーツにおける男女格差問題を検討する際、ほとんどが新聞、雑誌、テレビを対象としてきた。それは世界的に主要なメディアであり、人々のステレオタイプに影響する可能性が高いからである。一方、日本の場合には、男女を問わず幅広い世代に親しまれ、コミュニケーションが高い¹⁹⁾漫画というメディアがある。しかし漫画はレベルの低い文化とみなされてきたことに加え、日本で固有の発達を遂げたため長らく海外研究者の興味を引かなかったことから、近年に至るまでアカデミックな研究対象とされてこなかった。さらに、漫画には概ね二、三年のサイクルで絶版となるため収集が困難となるという問題もあり、研究上の障害となってきた。しかし、2010年の雑誌・書籍合わせたコミック販売金額は4091億円、販売部数は5億冊を超え不況と言われる出版界を支えていること²⁶⁾、アニメと共

に翻訳版が海外に輸出され好評を得ていることなどから、近年その経済的、文化的価値が見直されてきている。また収集の問題についても、漫画を数多く扱う古書店の増加やインターネット販売や復刻版の出版により、以前に比べて容易になった。それらの結果、漫画を対象とする研究も近年増加してきている。漫画が扱う題材の中でもスポーツは、挫折・努力・成功といったストーリーを盛り込みやすく、さまざまな伝統的価値観とも相性が良いことから中心的な題材とされてきた。特に少年誌では掲載作品の1割程度をスポーツ漫画が占めている²⁹⁾。その中でも野球を題材とした漫画(以下、野球漫画)は漫画文化の初期から今日まで、幅広い読者を対象とした多くの作品が掲載されてきた¹⁷⁾。その意味で野球漫画はスポーツ漫画の代表的なジャンルと言える。

一方、題材となっている野球は、女性スポーツが日本の中等以上の教育機関を中心に普及し始めた当初から「女性向けではない」という理由で教育界から禁止された歴史を持つ。その後、リトルリーグを中心に女子の間に野球が広がっていったが、大会参加資格を認めない連盟に登録している中学・高校での学校運動部活動が障害となり、競技の継続が困難であった。しかし全国高等学校女子硬式野球連盟が1997年に発足したことにより、制度上は小学生のリトルからプロまで一応継続することが可能となってきた。それら活動が目に見える成果として結実したのが、2008年8月からの1年間におきた、第3回女子野球ワールドカップ初優勝、女子プロ野球選手・吉田えりの誕生、日本女子プロ野球機構の発足という3つの出来事である。このように成果は出始めているものの、競技者数やチームが少ないことから競技を取り巻く環境は男性に比べて著しく劣っているのが現状である。

ところで漫画は商業ベースで制作されるため、それぞれの作品は読者に受容される必要がある。必然的に漫画におけるジェンダー像は、「どのような価値観を持つ読者に読ませるか」つまり、作品が掲載された時期や掲載される漫画雑誌の読者の性や年齢などにより受容されるジェンダー像が反映されると

考えられる。スポーツ漫画の代表である野球漫画は、今日に至るまで男女格差が激しい種目を題材とするため、これまでもジェンダー研究の材料として用いられてきた。これまでの研究が明らかにしているところでは、野球漫画の登場人物は男性が中心になっていること³²⁾、女性は選手²⁰⁾、マネージャー²⁷⁾、監督⁶⁾などさまざまな役割で登場するが、いずれの場合も母親や異性愛の対象として描かれているということである。こうした描かれ方は、単にフィクションとしてその場で消費されるのみでなく、読者が現実社会との関わり方を判断する際の判断基準となり¹⁶⁾、女性が野球に参加する機会を制限することに繋がると考えられる。

しかしこれまでの漫画を題材としたジェンダー研究では、少数の漫画を対象とした作品評価的な研究であることから、対象とした作品や解釈の際の恣意性は否定できない。また、読者の性、年齢や作品掲載の時期など、ジェンダー表象に影響すると思われる要因について量的な比較が行なわれていないため、野球漫画の中で表象される「野球に関連して女性が果たすべき機能」が対象読者や掲載時期によりどのように変化するかについて検討できない。そこで本研究では読者の性、年齢および作品の掲載時期ごとに代表性の高い野球漫画を対象とし、量的な指標を用いて作品で描写された「女性が果たすべき機能」について検討する。

2. 方 法

分析対象の抽出に際しては、第一段階として200作品以上の野球漫画を一覧形式で掲載しているインターネットのサイトを10サイト抽出し、掲載された作品から609の作品リストを作成した。これら作品の中には単行本化されていないものも多く、また単行本化された作品のほとんどが絶版となっているため、入手し得た207作品(タイトルベースで34%)から、オリコン調査²²⁾によって10代から40代にわたって「ハマった作品」として挙げられた作品を中心に、作品掲載誌の読者特性と掲載時期が母集団と比較的近くなるよう分析対象を選定した。なお女性向

けの野球漫画については比較的短編が多かったため、母集団の比率より多くの作品を対象とした。

作品の選定に際しては有力な少年漫画雑誌が相次いで発行されるようになった1960年から2009年までを対象期間とした。分析は作品が掲載された時期、想定される読者特性を主たる独立変数とし、女性全体および役割毎に登場する人数および頁に占める比率を従属変数とした。ところで前述のように1991年以前のプロ野球や高校野球は選手としての女性を排除している。このように野球の 카테고리によって女性の参加資格が異なるため、独立変数として加えた。これら3つの独立変数間に交互作用は無いものと仮定し、それぞれの独立変数ごとに検討を行なうが、ベースとなる作品の総ページは10万余ページと膨大であり、比率に十分な根拠があると思われることから要因毎の分析に際しては検定を実施せず構成率の比較に留めることとした。

以下、それぞれの変数について記述していくこととする。まずは、作品の年代についてであるが、対象とした作品の内、最も短いものは1回限りの読み切りであり、長期に亘るものは10年を超える。また作品によっては2012年2月の時点で未だ連載中のものもある。このように作品の掲載時期を特定することは困難であるが、連載開始時には登場人物などの設定が定まっていると考えられる。したがって作品の掲載時期は、作品の第一話が掲載された年とし、期間の区分は第二次フェミニズム運動が日本で盛んになり始めた1970年代とスポーツにおける女性の地位向上が求められるようになった1990年代で区切り、1960年代、1970～1980年代、1990年以降の3群とした。

次に読者特性については、当該作品の掲載誌の読者特性とし、メディア・データ⁷⁾を中心に「JMPA読者構成データ」²⁴⁾、メディア・ガイド²⁵⁾²⁸⁾から読者の性別構成比および、年齢の中央値、または平均値を算出した。次に性別構成比から作品を男性向けと女性向けに分類し、男性向け作品については小学生以下(以下、児童漫画)、中高生(以下、少年漫画)、19歳以上(以下、青年漫画)の3群に分類した。ま

た女性向け作品については、作品数が少ないことから群分けを行わず女性漫画として一本化した。最後の独立変数である野球カテゴリーについては、女性の参加資格を考慮し、少年野球(草野球・中学部活を含む)、高校野球、プロ野球の3群とした。ただし長編漫画に見られるように、ストーリーが進むにつれて、野球のカテゴリーが変わる場合には、作品をそれぞれの部分ごとに区分して集計した。例えば、少年野球からアメリカメジャーリーグまでの主人公の活躍を7年間に渡って連載した「MAJOR」は、少年編、高校編、プロ編というように区分して処理した。表1は分析対象とした作品と分類である。

最後に従属変数についてであるが、分析対象とした登場人物は作品中で氏名が示されるか、あるいは家族など主要人物との関係が明示された女性のみとした。従属変数となる女性全体の登場頻度については、ページ内に少なくとも一名が登場する頻度とし、役割ごとの登場頻度については人物ごとに登場頻度を求めた上で役割毎に集計した。ここで役割は野球領域と生活領域に分け、野球領域については「指導者」、「マネージャー」、「選手」、「ファン」「野球その他」の4区分とした。また生活領域についての役割は野球領域以外での関係であり「家族」、「恋愛関係」、「友人」、「生活その他」の4区分とした。ここで「恋愛関係」は片思いを含め、野球領域の登場人物から恋愛感情が示されている人物とし、それ以外の同級生や幼馴染みなどは友人とした。また「野球その他」には記者、医師、球団オーナーが「生活その他」は学校の教師や近所の主婦などが含まれる。これら役割は必ずしも背反的ではないが、構成比の算出に際しては野球領域の役割を生活領域の役割より優先し、野球領域の役割については野球との関連の強さに応じて選手>指導者>マネージャーの序列をつけた。また生活領域の役割については、それぞれ役割の中で最も期間が長いものとした。

3. 結果と考察

3-1. 作品全体を通しての検討

分析対象とした漫画について作品別に女性登場人

物の数(以下、女性数)および作品全体の頁に占める比率(以下、女性率)を算出したところ、女性数は平均5.9名(SD:5.53)登場し、女性率の平均は41.7%(SD:.533)であった。女性数、女性率共に標準偏差が大きいことから作品間の差が顕著であると言える。また、全作品の頁合計に占める女性登場頁の比率を算出したところ、25.2%であった。個々の作品の女性率の平均に比べ、対象全頁に占める女性率が明らかに低かったことから、長編作品は短編作品と比較して女性率が低いと考えられる。作品の頁数と女性数および、女性率の相関を算出したところ、女性数については.47($p<.01$)、女性率については-.35($p<.05$)とそれぞれ有意な相関を得た。つまり長編作品の場合、登場する女性の数は増加するものの、個々の人物の登場する比率が少なくなると言える。作品に登場する人物の数をストーリーの広がりやの指標、人物一人当たりの登場比率をストーリー展開上の重要性の指標として考えると、一般的傾向として長編作品ほどストーリーを広げるため様々な女性が登場するが個々人の重要性が低いと考えられる。さらに登場する女性の役割について見てみると、66%が野球以外の関係者であり、その内59%が主要登場人物の家族であった。男性と比較して登場人数、頻度共に少ないこと、また登場した女性の多くが家族や友人など野球とは直接関係しない生活領域の人物となっていることから、女性は野球から切り離して描かれていると言える。

3-2. 作品掲載時期による比較

図1は年代ごとにそれぞれの役割の登場数を集計し、各年代の作品数で除することにより1作品あたりの平均登場数を算出したものである。1960年代と比較して1970-80年は倍増、1990-00年代は3倍となっており、年代が進むにつれ作品に登場する女性の数は増加している。また内訳を見ると1960年代は、家族、恋愛関係など野球領域以外がほとんどであったのに対し、1970-80年代以降は野球領域の役割を担う人物の数が増加しており、1990-00年代ではおよそ半数が野球領域の人物によって占められている。特に1990-00年代の選手とマネージャーの人数

表1 分析対象作品一覧

タイトル	作 者	年 代	対象	カテゴリー
巨人の星	梶原一騎/川崎のぼる	60年代	児童	高校・プロ
ちかいの魔球	福本和也/ちばてつや	60年代	児童	プロ野球
少年ジャイアンツ	ちばてつや	60年代	児童	その他
どろんこエース	一峰大二	60年代	児童	少年野球
リトル巨人くん	内山まもる	70-80年代	児童	プロ野球
キャプテン	ちばあきお	70-80年代	少年	少年野球
ドカベン	水島新司	70-80年代	少年	高校野球
タッチ	あだち充	70-80年代	少年	高校野球
逆境ナイン	島本和彦	70-80年代	少年	高校野球
名門! 第三野球部	むつ利之	70-80年代	少年	高校野球
えくすかりばー	青山剛昌	70-80年代	少年	高校野球
県立海空高校野球部員山下たろーくん	こせきこうじ	70-80年代	少年	高校野球
侍ジャイアンツ	梶原一騎/井上コオ	70-80年代	少年	プロ野球
野球狂の詩	水島新司	70-80年代	少年	プロ野球
紀元2600のプレーボール	大和和紀	70-80年代	女性	高校野球
泣き虫甲子園	やまさき十三/あだち充	70-80年代	女性	高校野球
甲子園の空に笑え	川原泉	70-80年代	女性	高校野球
初恋甲子園	やまさき十三/あだち充	70-80年代	女性	高校野球
青春一直線	やまさき十三/あだち充	70-80年代	女性	高校野球
おんな甲子園!	野妻まゆみ	70-80年代	女性	高校野球
ドラベース ドラえもん超野球外伝	むぎわらしんたろう	90年代以降	児童	その他
ゴーゴー! ゴジラッ!! マツイくん	河合じゅんじ	90年代以降	児童	プロ野球
エース!	高橋陽一	90年代以降	少年	少年野球
メジャー	満田拓也	90年代以降	少年	少年・高校・プロ
最強! 都立あおい坂高校野球部	田中モトユキ	90年代以降	少年	高校野球
4番サード	青山剛昌	90年代以降	少年	高校野球
H2	あだち充	90年代以降	少年	高校野球
ROOKIES	森田まさのり	90年代以降	少年	高校野球
クロスゲーム	あだち充	90年代以降	少年	高校野球
Mr.FULLSWING	鈴木信也	90年代以降	少年	高校野球
青空	原秀則	90年代以降	青年	高校野球
おおきく振りかぶって	ひぐちアサ	90年代以降	青年	高校野球
ダイヤのA	寺嶋裕二	90年代以降	青年	高校野球
ストッパー毒島	ハロルド作石	90年代以降	青年	プロ野球
ONE OUTS	甲斐谷忍	90年代以降	青年	プロ野球
名門! 第三野球部 飛翔編	むつ利之	90年代以降	青年	プロ野球
うすべにの嵐	矢沢あい	90年代以降	女性	高校野球
メイプル戦記	川原泉	90年代以降	女性	プロ野球
君は青空の下にいる	森本里菜	90年代以降	女性	高校野球
ナツの甲子園	榎本ちづる	90年代以降	女性	高校野球
バッテリー	あさのあつこ/柚庭千景	90年代以降	女性	少年野球

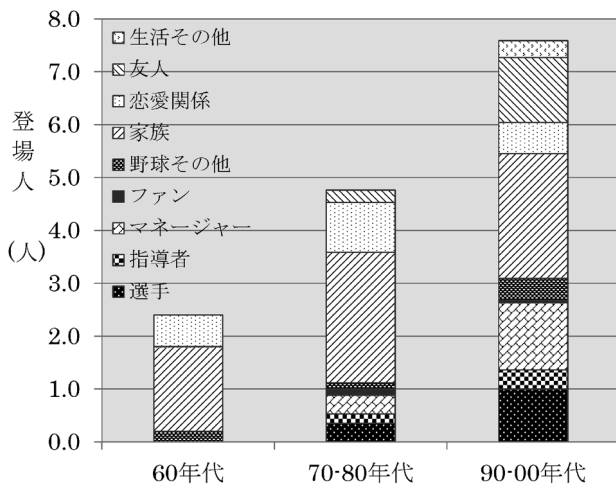


図1 1作品あたりの女性登場人物の数と役割 (年代別)

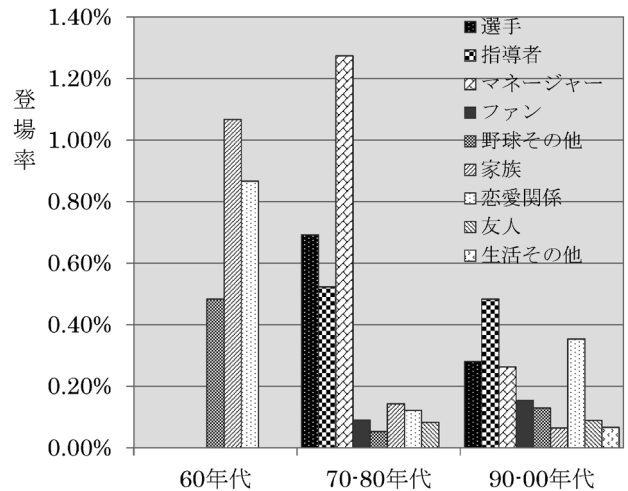


図2 女性登場人物一人当たりの平均登場率 (年代別)

は1970-80年代と比較して3倍以上になっている。これらの結果は1990年代に始まるスポーツにおける女性の地位向上運動と時期を同じくしており、選手、マネージャーの増加についてはそれぞれ中体連の軟式野球への女子参加、および高校野球の女子記録員ベンチ入り認可（いずれも1996年）の影響が大きいと考えられる。また1990-00年代は球団オーナーや記者など、従来男性色の強い職業を含む「野球その他」も増加しており、女性の社会進出の影響が伺える。生活領域については、全ての年代で一貫して多かったのが家族と恋愛対象であり、家族については全102件中61件が母親であった。1990-00年代の特徴として友人が増えている点が挙げられるが、その年代の友人の増加については選手の増加により男性選手の恋愛関係の機能が友人に代替されたためと思われる。

一方、頁全体に占める登場率を年代ごとに算出したところ、1960年代は極めて低く11.6%に過ぎなかったが、1970-80年代は21.9%、1990-00年代は29.5%と増加傾向が認められた。女性数と女性率を比較すると、1960年代から1970-80年代にかけては両者の増加率はほぼ等しいのに対し、1990-00年代については女性数の増加ほどには女性率は増えていない。このことは、1990-00年代は他と比較して女性登場人物一人当たりの重要性が低くなっている可能

性を示唆する。次に登場人物一人あたりの登場率を役割ごとに算出したところ（図2参照）、1960年代は家族や恋愛関係といった生活領域の人物が重要な機能を果たしているのに対し、1970-80年代はマネージャーを中心とした野球領域の人物がそれに取って代わっている。また1990-2000年代は野球領域については指導者を除く全ての役割の登場率が減少し、生活領域については恋愛関係が増加している他は大きな変化は認められない。選手とマネージャーについては、当該の役割の登場人数が増加したことに伴い、一人当たりの重要性が分散した可能性がある。特にマネージャーの登場率の減少が目立つが、一つの原因として複数のマネージャーが登場する作品が掲載されるようになったことにより、マネージャー機能が分散し、結果として登場率の減少という結果に結びついていると考えられる。1965年にテレビドラマに登場した女子マネージャーは、1970年代から少女漫画を中心として野球漫画に登場し始め、1981年の大ヒット野球漫画「タッチ」の掲載を期に現実でも高校野球を中心に一般化した。

ところで作品の長さについては、女性の登場数との間で正の相関が、一人当たりの登場率との間で負の相関がそれぞれ認められている。そのため作品の掲載時期ごとに作品の平均頁数を算出したところ、1960年代は1324頁、1970-80年代は2257頁、1990-00

年代は2735頁であった。これら平均頁数と掲載時期ごとの女性登場数を比較すると、1960年代から1970-80年代にかけて、頁数、登場数共に増加しており、1970-80年代から1990-00年代にかけては頁数の増加に比べ登場数の増加が更に大きくなっている。また登場率について1960年代と1990-00年代を比較すると、頁数が増加し一人当たりの登場率が減少していることから、登場率は頁数の長さによってある程度説明されると言える。しかし、1960年代と1970-80年代を比較すると頁数の増加に比べ、一人当たりの登場率は減少していない。これらのことから年代による変化は、単に頁数の影響ではなく掲載時期による影響と考えて良いと思われる。

3-3. 読者特性による比較

人は自分と共通性が高い登場人物に共感し同一化しやすいことから、それぞれの漫画の登場人物は読者特性を考慮したものになる。メディア・データ等の読者属性調査によれば、児童誌も含め男性漫画誌の読者には女性も2割強含まれるのに対し、女性漫画誌の読者はほぼ女性に限定される。つまり、女性漫画における女性の描かれ方は、大きく異なると考えられる。このことを検証するため、読者特性ごとに女性の平均登場数、登場率をまとめたものが図3、図4である。図3より登場数については、全体では少年漫画と青年漫画が児童漫画と女性漫画に比べて多い。また男性向け漫画では家族を中心として生活領域が多いのに対し、女性漫画では選手を中心に野球領域が多い。生活領域ではいずれも家族が最も多いが、読者年齢が高くなるにつれて恋愛関係や友人が多くなっている。一方、野球領域については少年漫画と青年漫画でマネージャーの登場数が最も多く、少女漫画では選手が最も多い。

次に登場率(図4)を見ると、児童漫画と少年漫画では全ての役割で低いのに対し、青年漫画では指導者とマネージャーが高くなっている。青年漫画では野球領域の中では指導者とマネージャーは異性愛の対象として描かれることが多く、同年代の対象としてマネージャーが、年長者の異性愛対象として指導者が描かれており、それぞれ女性的な体型や涙も

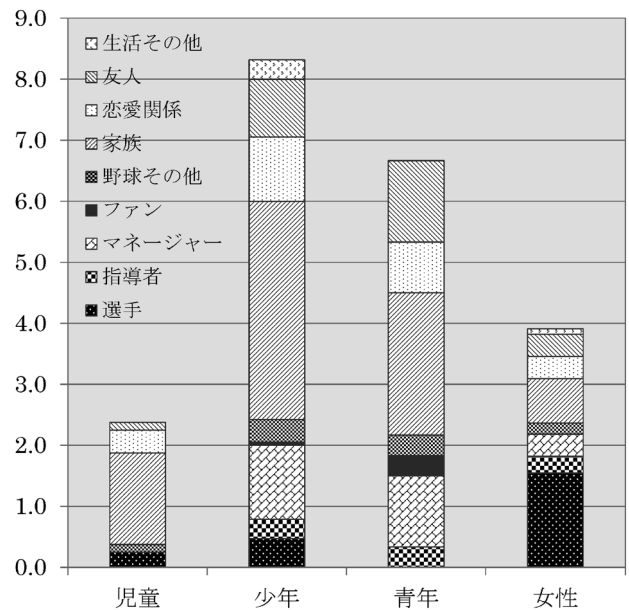


図3 1作品あたりの女性登場人物の数と役割(対象別)

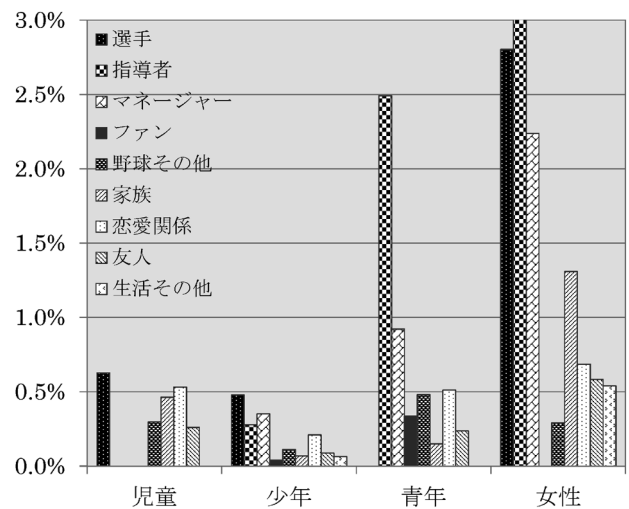


図4 女性登場人物一人当たりの平均登場率(対象別)

ろさなどが強調されている。一方女性漫画では、多くの女性が主要人物として登場しており、友人や家族との交換が描かれることから、男性向け漫画と比較して生活領域への女性登場率が高くなっている。ここで注目すべきは、女性漫画が他と比較して野球領域の登場数では選手が、登場率では指導者が明らかに高くなっている点である。児童漫画や少年漫画における女性選手の多くが少年野球で弱小チームの

人数合わせとして登場するのに対し、女性漫画では高校野球やプロ野球の舞台で男性選手と対抗する構図で描かれている。こうした設定は、女性が制度として除外されてきたことに対する不満、または野球に主体として参加する要求を示しているものと考えられる。

作品の長さや登場数、登場率について検討するため、それぞれの読者特性ごとの作品の平均頁数を算出したところ、児童漫画が1345頁、少年漫画が3716.8頁、青年漫画が3336頁、女性漫画が420.4頁であった。少年・青年漫画と比較して児童・女性漫画の平均頁数が少ないことは登場数で少年・青年漫画が多かったこと、登場率で女性漫画が多かったことについてある程度説明可能と考えられる。しかし、登場数について少年漫画が女性漫画に比べて明らかに少ないこと、登場率について少年漫画に比べて青年漫画が明らかに少ないことなどについて十分に説明可能とは言えない。したがって読者特性による差異は、単に頁数の影響ではないと思われる。

3-4. 野球の 카테고리による比較

前述のように野球界全体が性による制度的な差別を撤廃してきた中、高校野球においては今日に至るまで選手としての女性参加は制度として制限されてきた。こうした制度の違いが作品内での女性の表象に与える影響を検討するため、野球の 카테고리ごとに登場数、登場率についてまとめたものが図5、図6である。登場数全体についてはプロ野球漫画と高校野球漫画が多いのに対し、登場率については少年野球漫画が最も高かった。またいずれの 카테고리においても野球領域の人物は3割程度であり、大半は生活領域の人物であった。領域ごとに人物構成を見ていくと、生活領域は登場数で家族が最も多くその6割が母親であったが、プロ野球漫画では伴侶である妻が39件中6件と少数ながら登場していた。一方野球領域は、カテゴリ全体で見ると選手の登場数、登場率が共に高かったが、その中で高校野球漫画についてはいずれも低かった。高校野球漫画については選手に代わって登場数ではマネージャーが、登場率では指導者がそれぞれ最も高かった。

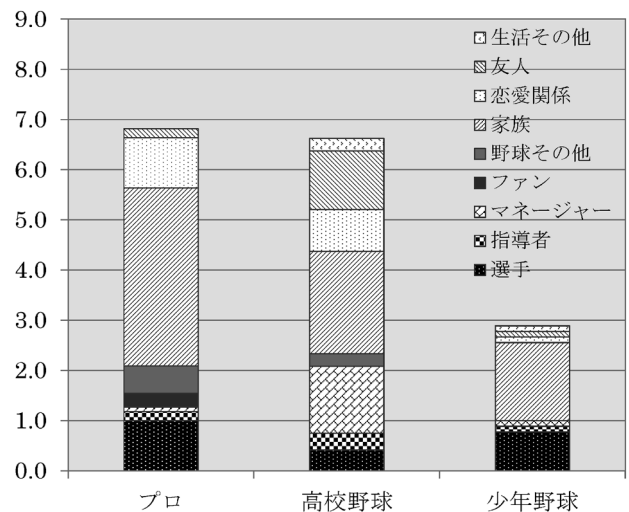


図5 1作品あたりの女性登場人物の数と役割(カテゴリー別)

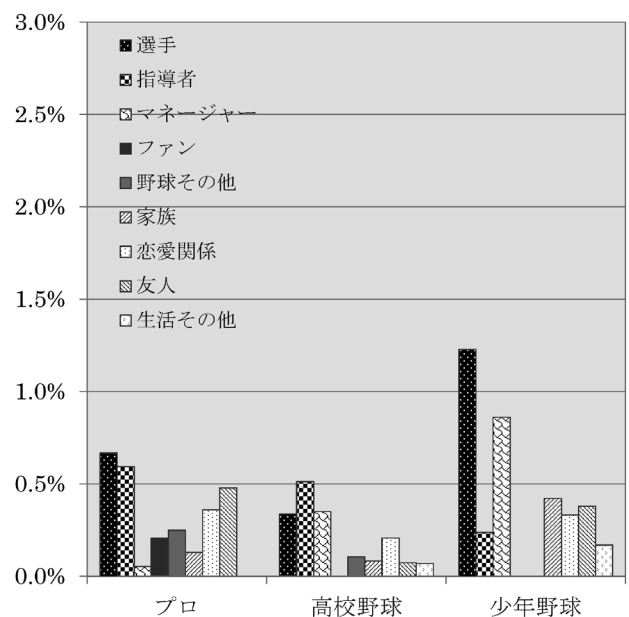


図6 女性登場人物一人当たりの登場率(カテゴリー別)

た。以下、これらの結果を踏まえ、本節の主たるテーマである制度と女性の表象との関係について論を進めていくこととする。

前述のとおり、漫画の中での女性選手は、登場数、登場率のいずれについても少年野球が最も高く、プロ野球がそれに次ぎ、高校野球が最も低くなっている。この結果が女性参加を規制する制度の直

接的な影響なのか、実態を反映しているのかについて検討するにあたり、現実の女子野球選手について把握しておく必要がある。まず少年野球であるが、リトルリーグ、リトルシニア等学校運動部以外では、性別規定がなく男女混合で実施されており、実際多くの女子児童、生徒が参加している。一方部活動としての野球(軟式)については、2011年の中学体育連盟加盟の部活動登録人数で、男子約28万人に対し、女子は約1600名と大きな差があるもののある程度の参加者は認められる。次に高校野球であるが、高野連が所掌する大会についての大会参加者資格規定により女子は除外されており、試合への参加資格が与えられていない。また女子のみによる硬式野球大会も1997年夏から実施されているが、女子硬式野球部がある高校は全国でも少なく地域も偏っており、注目度も低い。つまり女子高校球児はかなり稀な存在と言える。最後に女子プロ野球選手についてであるが、戦後存在し消滅した女子プロ野球団を除くと、2009年に高校生が、関西独立リーグに属するプロ野球チームと正式に契約し、初の女性プロ野球選手として注目を集めたが、その後の女性進出には繋がっていない。つまり現実での女性野球選手は、野球カテゴリーが上がるに連れて数が少なくなっている。

こうした女性と野球を巡る現実と、漫画というフィクションでの登場数や登場率の不一致に加え、現実の高校野球ではごく稀な女性指導者が、高校野球漫画では比較的多く登場することを考えると、漫画というフィクションの世界では、現実より制度に強く影響されると言える。なお、これまでも検討してきた作品の平均頁数と女性登場数および登場率との関連についてであるが、カテゴリーごとの平均頁数は、プロ野球漫画が2381.7頁、高校野球が2488.7頁、少年野球が2105.9頁と大きな差が認められなかったことから、本節において認められたカテゴリー間の役割ごとの登場数や登場率に認められた差異は頁数の影響とは言えない。

5. ま と め

スポーツはジェンダー最後の砦と言われるが、中でも野球は日本において中等教育以上の教育機関で女性スポーツが普及し始めた当初から禁止されるなどジェンダー・バイアスが強い競技である。本研究ではジェンダー観を規定する文化装置としての野球漫画を対象とし、そこで描かれる女性の表象について作品の年代別、読者特性別、カテゴリー別に検討した。その結果、以下の4点が明らかにされた。

1. 野球漫画全体を通して、登場する女性の大半は家族等日常場面で男性登場人物を支える役割の人物であり、野球場面での役割人物の中でも支える役割のマネージャーが多い。
2. 作品の年代については、女性の地位向上運動と期を同じくして、野球に関連した役割を持つ女性が増えてきたが、一人あたりのストーリー上の重要性は逆に低下している。
3. 読者特性については、女性向け漫画では野球に関連した役割を持つ女性が多く登場し、一人あたりのストーリー上の重要性も高いのに対し、男性向け漫画では対象年齢の上昇に伴い野球に関連した役割を持つ女性も異性愛の対象として重要な位置を占めている。
4. 野球のカテゴリーについては、制度として女性選手が除外されている高校野球漫画では他のカテゴリーの漫画と比較して選手の登場数、登場率共に最も少ない。

以上のことから、近年ある程度の変化は見られるとはいえ、女性は野球から閉め出されており、多くの人が幼少期から親しむ漫画というメディアによって、野球における男性の優位性という価値観を再生産していると言える。なお男性は女性漫画をほとんど読まないのに対し、女性は男性向け漫画も比較的読んでいることから、女性は漫画を通して男女両方の野球観に触れるのに対し、男性は女性の野球観に触れる機会がない。野球を実施する環境の男女格差の是正が遅れている原因の一端も女性の野球観に対する男性の無理解が関与しているかも知れない。

最後に本研究の限界について記述する。野球漫画は歴史も古く今日でも掲載され続けているジャンルである。一方、漫画は小説や専門書に比べ入れ替わりが激しく、比較的短期間で絶版となるため、発行年の古い作品には入手困難なものも多い。そのため全ての作品を収集し分析することはほぼ不可能と言って良い。本研究のようなサンプル調査が次善の策となるが、3-1で確認したように作品間の差が極めて大きく、どのような作品がサンプルとして選択されるかが、結果に大きな影響を与える。本研究で得られた結果は社会環境の変化などの要因により了解可能なものではあったが、さらに信頼性を高めるためには、同様のフレームによる異なる作品を分析し、データを追加していくことが必要であろう。

本論文は、平成23年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文をもとに作成されたものである。

引用文献

- 1) Amateur Athletic Foundation of Los Angeles (1999). CHILDREN AND SPORTS MEDIA.
- 2) Brown, P. (1995). Gender, the Press & History: Coverage of Women's Sport in the Newcastle Herald, 1890-1990. *Media information Australia*, 75, 24-34.
- 3) Duncan, M. C. and Messner, M. A. (2000). *Gender in Televised Sports: 1989, 1993 and 1999*. Los Angeles, CA: Amateur Athletic Foundation of Los Angeles.
- 4) 男女共同参画局. 第4回世界女性会議行動綱領「第IV章戦略目標および行動 J. 女性とスポーツ」. <http://www.gender.go.jp/kodo/chapter4-J.html>
- 5) 男女共同参画局. 国連特別総会「女性2000年会議」: 北京宣言及び行動綱領実施のための更なる行動とイニシアティブ「第2章 行動綱領の12重大問題領域実施に関する成果と障害 J. 女性とメディア」. <http://www.gender.go.jp/sekai-kaigi/initiative.html>
- 6) 藤田由美子 (2011). スポーツマンガにおけるジェンダー秩序に関する考察. 九州保健福祉大学研究紀要. 12, 66-78.
- 7) 月刊メディア・データ. 1971年11月号~2011年6月号, 東京, メディア・リサーチ・センター株式会社.
- 8) Gerbner, G., Gross, L., Morgan, M. & Signorielli, N. (1980). The 'Mainstreaming' of America: Violence profile no. 11. *Journal of Communication*, 30(3), 10-29.
- 9) Gerbner, G. & Signorelli, N. (1979) *Women and minorities in television drama: A research report*. Philadelphia University of Pennsylvania. Annenberg School of Communications.
- 10) Halbert, C and Latimer, M. (1994). 'Battling' Gender Language: An Analysis of the Language Used by Sports Commentators in a Televised Coed Tennis Competition. *Sociology of Sport Journal*, 11, 298-308.
- 11) Hall, S. (1973). *Encoding and Decoding in the Television Discourse*, Birmingham.
- 12) 平川澄子 (2002). スポーツ, ジェンダー, メディア, イメージ —スポーツ CFに描かれるジェンダー—. 橋本純一編, 現代メディアスポーツ論, 東京, 世界思想社, 91-115.
- 13) 井谷恵子 (2004). スポーツにおけるジェンダー構造の現状を見る. 飯田貴子・井谷恵子編, スポーツ・ジェンダー学への招待, 東京, 明石書店, 20-24.
- 14) 飯田貴子 (2002). メディアスポーツとフェミニズム. 橋本純一編, 現代メディアスポーツ論, 東京, 世界思想社, 71-90.
- 15) 神原直幸 (2009). バレーボール中継映像におけるジェンダー表象, 順天堂スポーツ健康科学研究, 1(2), 173-183.
- 16) 加藤秀一 (1998). 性現象論 差異とセクシュアリティの社会学, 東京, 勁草書房.
- 17) 松田恵示 (1993). スポーツとマンガ—生活世界におけるスポーツへの解釈的アプローチ. 大手前女子大学論集. 27, 197-219.
- 18) Messner, M. A. (1992) *POWER AT PLAY: Sports and the Problem of Masculinity*, Beacon Press.
- 19) 宮原浩二郎 (2001). 知的触媒としてのマンガ. 宮原浩二郎・荻野昌弘編, マンガの社会学, 東京, 世界思想社, 4-33.
- 20) 宮沢千春 (2004). スポーツマンガに潜むジェンダー・バイアス—女性選手を登場人物とする野球マンガの分析を通じて. *コミュニティ* (7), 129-149.
- 21) Murray, M. (1991). Media impact on women in sport and sport leadership. *Journal of Physical Education, Recreation & Dance*, 62, 3, 45-56.
- 22) Oricon life ニュース, 2009年08月08日. ハマッた野球漫画ランキング1位「タッチ」, 永遠のヒロイン「浅倉南」人気健在. <http://life.oricon.co.jp/>
- 23) Prisuta, R. H. (1979). Televised Sports and Political Values. *Journal of Communication*, 29(1), 94-102.

- 24) 社団法人日本雑誌協会. JMPA 読者構成データ (2002年 日本雑誌協会調べ). http://www.j-magazine.or.jp/data_002/index.html
- 25) 集英社<AD NAVI>. MEDIA GUIDE 2011 少年・青年コミック誌. http://adnavi.shueisha.co.jp/mediaguide/2011/m_comic/index.html
- 26) 出版科学研究所(2011). 2011出版指標年報. 東京, 社団法人全国出版協会.
- 27) 高井昌史(2005) 女子マネージャーの誕生とメディアスポーツ文化におけるジェンダー. 京都, ミネルヴァ書房, 109-133.
- 28) 竹書房. 広告出稿について. <http://www.takeshobo.co.jp/advertising>
- 29) 雲野加代子 漫画におけるジェンダーについての考察 ～恋愛と武闘～ 大阪明浄大学紀要 6.77-84.
- 30) Williams, D. (2006). Virtual Cultivation: Online Worlds, Offline Perceptions. *Journal of Communication*, 56, 69-87.
- 31) World Economic Forum (2011) Global Gender Gap 2011. <http://www.weforum.org/issues/global-gender-gap>
- 32) 米沢嘉博(2002). 戦後野球マンガ史 手塚治虫のいない風景. 東京, 株式会社平凡社.

(平成24年9月21日 受付)
(平成25年2月19日 受理)